オブジェクション171

明らかにされた事件事故編

本編は、次の10項目からなる。

① 戦艦大和を特攻させた一言
② 大坂なおみが嫌いな記者会見
③ 愛知リコール署名集めの重圧
④ ＡＬＳ嘱託殺人疑惑の医師が関わった父の死
⑤ ハマスの攻撃とイスラエルの過剰反応
⑥ ミャンマー、クーデター首謀者の自己都合
⑦ 朝乃山、テメーは6場所出場停止だ！
⑧ サッカーでのヘディングで脳損傷
⑨ 命令に従う心
⑩ みずほ銀行システム障害

・文中敬称略。
・文中の会話文には、筆者が推測してのフィクションが含まれる。
・以下の【 】内は、新聞記事・週刊誌の引用・要約を示す。

岡森 利幸

① 戦艦大和を特攻させた一言

【毎日新聞朝刊2021/4/8 総合・社会

１９４５年４月７日、沖縄方面に出撃した艦隊は、大和など６隻が撃沈され、戦死者は４，０００人以上。大和の乗員３，３３２人のうち、生還したのは２７６人だった。海軍内部でも反対意見が強かった無謀な特攻作戦は、なぜ行われたのか、出撃・沈没から７６年、近年の研究成果からひもとく。

昭和天皇実録は、３月２６日軍令部総長及川小四郎が天皇に面会したことが書かれているが、その会話内容は書かれていない。会話の内容を伝えるのが、宇垣纏（まとめ）海軍中将の日記だ。大和が撃沈された４月７日に「茲（ここ）に到れる主因は軍令部総長奏上の際航空部隊丈（だけ）の総攻撃なるやの御下問に対し、海軍の全兵力を使用致すと奏答せるに在りと伝ふ」と書かれていた。

つまり、沖縄戦の作戦説明を聞いた昭和天皇が及川に「航空部隊だけなのか」と御下問したことが、大和出撃のきっかけとなったことがわかってきた。及川は天

皇のその意思を忖度し大和出撃を実行したとみられる。航空機の性能が急速に向上したことから、戦艦の存在価値は低下。１９４１年１２月１６日に完成してから大和の戦果はほとんどないまま大戦末期を迎えていた。また、燃料を膨大に必要とすることから「お荷物」の存在になりつつあった。

昭和天皇は「大和」に対する期待が高かったようだ。戦後に述べた「昭和天皇独白録」によると、

「とつておきの大和をこの際出動させた。之も飛行機の連絡なしで出したものだから失敗した」

「作戦不一致、全く馬鹿馬鹿しい戦闘であつた」】

宇垣中将の日記では、天皇と及川との会話の内容が部分的に伝聞として記述されたもので、一次資料ではないにしろ、昭和天皇が「航空部隊だけなのか」と御下問したことは、確かだろう。その質問にどう答えたかは明らかではないが、「はい、航空部隊だけであります」とだけ答えた可能性が大きいだろう。及川にとって、予期しない御下問であって、答えをあらかじめ用意していたとは思えないからだ。「はい」と答えた及川であっても、その後、御下問が暗に示すところをあれこれ考えたはずだ。そして、御下問というより御指示として解した。

「航空戦力だけでなく、水上戦力も行使しろということか」「水上戦力では、海軍の大和ぐらいしかない。すると……」

その御下問を言い換えると「大和がまだ健在なのに、なぜ使わないのか」になると及川は考えた。及川が「忖度（そんたく）」したというより天皇の御意向を承ったといえるだろう。

つまり、沖縄戦に「戦艦大和を出撃させたらどうか」という昭和天皇のサジェスチョンがあったことから、大和の無謀な出撃につながったことになる。

昭和天皇実録は、その言動について、事細かくすべて書かれているとされているが、天皇の戦争責任につながるような記録は避けるため、単に「面会した」としか書かなかったのだろう。「天皇が軍令部総長及川に戦艦大和出撃の御示唆なされた」などとは、その編集責任者が細心の注意を払って意図的に書かなかった、と言うべきかも知れない。それを書いたら、天皇が軍の作戦にまで口出（くちだ）ししていたことが知られてしまう。

天皇には大和の活躍を期待していたところがあったし、大和を使わない・使えない理由がよくわかっていなかったとみえる。大和が無用の長物化していたこと

を理解していなかった。そして軍や取り巻きが、絶望的な戦況を正しく伝えていなかった。おそらく彼らは「大本営発表」以上のことは言わなかった。大本営発表は虚偽ですよ、まっかなウソですよ、国民をだましているのですよ、とは口が裂けても言えなかった。

戦争の実情を天皇に説明したら、どうだったか。統帥権を持つ天皇にとって、作戦の説明などよりずっと重要だったはずだ。もしも、正しく伝えていたとすれば、**「それじゃあ、もう降伏するしかないじゃないか」**と判断なさったことだろう。天皇をだまして、むりやり戦争を推し進めていた軍部の姿が、この場面でも見えている。

及川は考え続けた、〈ならば、止むを得ない、とっておきの大和を出そう〉　あるいは〈無用の長物化していた大和を処分するにはうってつけの機会だ〉と開き直ったりして。さらに推測すれば、〈大和が轟沈すれば、３，０００の将兵が死ぬだろうな、なあに、栄光の大和とともに沈めば、彼らも本望だろうよ〉

それについて、私の見解をあえて言うと、「彼らは鉄クズといっしょに沈んでしまった」

天皇の期待を背負って、軍部は急遽、大和の特攻作戦を立てた。及川自身、大和一隻ぐらいでは、もうどうにもならないことを知っていたし、作戦本部の誰もが、大和の出撃が無謀だったことがわかっていた。勝算がなかった。海軍内部でも反対意見が強かったという。でも、天皇の御意向とあれば、仕方なく、軍の幹部は作戦を推し進めるしかなかった。その記録が宇垣日記以外、公式には何も残されていないところをみると、かなり秘密裏に、決定されたわけだ。

司令部は大和に出撃命令（沖縄特攻）を出した。燃料を片道分しか積まなかったことが、悲壮だった。帰還できない出撃だった。沖縄を目指したが、途中で敵側の圧倒的な航空戦力によって攻撃されることがわかっていた。敵潜水艦も、うようよしていた海域だった。日本側に艦隊を支援・護衛すべき航空戦力がほとんどなかったから、それらに対抗するすべがなかった。残存兵力の駆逐艦などを随伴させただけだった。

４月７日、案の定、１０隻の艦隊は、沖縄に向かう途中で、空からの攻撃になすすべもなく、一方的に攻撃された。３８０機もの軍用機が整然とした波状攻撃をしかけた。誇張した表現をすれば、よってたかって、なぶりものにした。

大和に乗り組んだ約３０００人は特に悲惨なことに

なった。この作戦失敗で、海軍の象徴的戦艦を失い、日本軍には打つ手がなくなったといえるが、降伏まで、あと4カ月間ぐずぐずしていた。軍事政権下の日本では、降伏するという意思決定ができなくなっていた。

大和沈没の報告を受けた天皇は、前傾の記事で記者が引用しているように、この大和出撃の失敗を「航空機の連絡がなかった」せいにし、司令部の作戦のおろかさを責めていたわけだ。しかし、当時の日本軍には、艦隊の護衛のための戦闘機部隊を編成することなどできなかった。数機の偵察機を付けるぐらいだった。そんな事情を最後まで理解されていなかったことになる。

② 大坂なおみが嫌いな記者会見

【毎日新聞夕刊 2021/5/27 総合
大坂なおみ、全仏での記者会見に出席しない考えを表明した。「過去の記者会見でアスリートの精神状態が無視されていると感じた。何度も同じ質問され、疑念を抱く質問をされることも多い。自分を疑うような人の前に自らをさらすつもりはない」
テニスのツアー大会では記者側から求められた会見を選手が拒否した場合は罰金が科せられる。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/31 総合
会見拒否の大坂なおみに罰金１６５万円。
今後、４大大会に出場停止になる恐れもある。全仏オープン女子シングルス１回戦で勝利後に記者会見を拒否したことで、大会主催者は大坂との話し合いの場を持つことを提案したが、不調に終わった。個々の選手に特例を認めることは不公平になるとしている。処分発表後、大坂はツイッターで「怒りは理解の欠如、変化は人々を不快にさせる」と投稿。】

【毎日新聞夕刊 2021/6/1 近事片々、社会
心の不調が原因で記者会見を拒否した大坂なおみ選手。「うつに苦しんできた」大坂が、全仏オープン棄権。仏連盟会長「申し訳ない。一刻も早い回復を祈っている」】

【毎日新聞朝刊 2021/6/2 一面、焦点
大坂選手、全仏テニスを棄権。〈心の健康（を害した）のため、うつと告白。問題を提起したが、支持されなかったことで、注目が高まり、重圧が募った。トップ選手はストレスに直面する。
以下にツイート全文（ここでは簡略化）――みなさん、こんにちは、私の数日前に投稿したときには想像したり意図したりしなかった状態になっている……】

【毎日新聞夕刊 2021/6/12 総合
大坂選手問題、取材も気遣いが必要。大坂はうつ状態があることを明かした。3年前から周囲の注目や期待が大きな負担になってきたという。】
【毎日新聞朝刊 2021/6/23 記者の目
大坂なおみ選手のうつ告白。
「試合に敗れた後の記者会見で泣き崩れている選手の映像を何度も見てきた」「大会側が会見に参加しなければ罰金として、協力している選手の精神状態を無視し続けている」】

1．記者会見しない宣言

これは、ツイッターへの投稿だった。大坂の一方的な宣言だった。主催者に正式に申し入れたことではないだろう。しかしながら、試合後の記者会見は、選手の義務として定着している。特に大きな大会では、その義務を果たさないと、高額な罰金が課せられ、次回の試合には出場停止の処分も下りうる。

試合後にインタビューがあることは、番組に組み込まれ、予定されていることだから、主催者側としては、すっぽかされては困るのだ。視聴者の多くは、試合後に選手がどんなことを語るのかに関心がある。負けた選手についても、興味深深なのだろう。

勝者がインタビューされるのは、それほど抵抗がないかもしれないが、敗者にもインタビューする。敗者が敗因を語るのは気が重い。記者からの質問は、慰めにもならないことだろう。

大坂は自分だけでなく、選手全体を考えての宣言だったかもしれない。

2．記者会見を拒否

宣言どおり、大坂は、一回戦を勝ち抜いた後、記者会をすっぽかした。コート上で〈黒地に、吊り上げた目と、歯をむき出し、裂けたような口が白く描かれた不気味なマスク〉をつけて、短時間のインタビューには応じた。大坂は、それでインタビューは十分と考えたのだろう。会見室での正規な記者会見には応じなかった。

この反抗的な態度に、主催者が怒った。すぐさま規約どおり、大坂に高額な罰金を課すことを発表した。

「何だ、その態度！　テメーには罰金を課す！　この大会の規約通りにやってもらわなければ、困る」

これを受けて、大坂が反発した。

「そんな罰金で、記者会見を強制するなんて……。あなた方は私たちの気持ちを少しも理解していないの

ね！」と大坂は、ほとんど涙ぐむ……。

むくれた大坂は、次の試合、二回戦を棄権することを決めた。大坂は我を通した。テニスでは世界的に大きいイベントである全仏オープン女子シングルスを蹴ったのだから、感情的な激しさを見せ付けた。これは棄権というより試合放棄だ。大坂はやる気をなくし、記者会見だけでなく、試合をスッポカしたわけだ。

「**もう記者会見などしたくない！**」という、悲鳴のような叫びを上げた。ほとんどヤケッパチ……。

3．大坂の記者会見嫌い

私は大坂の記者会見のニュース映像を見ていたとき、しばしば彼女が見せる、投げやりな、ふてくされた態度が気になっていた。質問に対してまともに答えず、記者に逆質問したりして、答えをはぐらかすことも多かった。記者たちは本意を語っていないと思うから、真意を聞き出そうと食い下がる。いい加減に答えている大坂に、記者はしつこく詰め寄る。

その理由がわかった気がする、〈彼女は、記者会見が嫌いだったのだ〉と。

記者会見で記者に問い詰められたりしたとき、彼女はその後しばらく「うつになった」と告白した。

白人警官らが黒人容疑者の首をひざで抑えた事件で火がついた人種問題で、彼女が政治的な発言やアピールをしたことにも関係するだろう。記者たちは、政治的なメッセージに関心を寄せてくるものだ。テニス以外のことで質問が飛んでくる。まともに答えないと、記者はそれが〈答えたくないこと〉だとは思わないから、何度でも聞いてくる。記者としても、そんな大坂のにえきらない態度に批判的にもなる。一般の人がそれにあおられて、さらなる批判が増幅する。これでは、ますます記者会見がいやになってくる。

記者会見で、答えたくないことをしつこく質問されるので、今般ツイッターへ投稿し、「もう記者会見しない！」と宣言したのだ。それは、選手に記者会見を求めている主催者側に相談するのが先決だと思われるが、彼女は先走った……。

単に「記者会見しない」と言うのでは、〈わがままを言っている〉〈ファンに対するサービス精神に欠ける〉などと思われても仕方がない。なぜ記者会見を嫌がるのか、ぜんぜん理解されない。

記者会見を嫌い、棄権までした大坂に、世間ではバッシングの嵐が巻き起こった。記者会見を嫌がることが、人々には想像できなかったろうし、試合放棄に等しい棄権は、プロのアスリートとしてあるまじき行為

だろう。自分の意見が通らなかったものだから、すねて棄権してしまったようにもみえる。試合を見に来る大勢の観客を裏切る行為だ。大坂が棄権して喜ぶのは、対戦が決まっていたライバル選手たちだけだろう。

4．記者会見の怖さ

記者会見は、質問する人が一人であっても、多くの人がレンズを通してみており、マイクを通して聞いている。大勢の前に立って話をするのは、テニスのプレーをするのとは別の世界だ。前者では、ささいなことで批判にさらされ、バッシングを浴びる。それが一部の人からであっても、言葉が何倍にも増幅する世界だ。欧米の記者たちはぶしつけな質問をするものだろう。そんなとき、ナイーブな彼女の心は動揺していたわけだ。

人前に立つとき、緊張する人は多い。人の前で話をすることが苦手な人であり、人によっては恐怖に感じるものだ。若い人に多く、特に子ども。例えば、彼らにとって教室で先生に指名されて答えさせられるのは脅怖以上のものがある。意地悪な先生は、手を上げない（答えがわからないふりをしている）児童・生徒をわざわざ指名し、答えさせる。そして、みんなの前で恥をかかせる。彼ら先生は、消極的な生徒を指導したことで、自己満足している。

大坂はそれに当てはまる人のようだ。なぜ恐怖を感じるのか、他の人にはぜんぜん理解されない。多くの人は「ナニよ、むしろ楽しいことじゃないの。てきとうに自己主張すればいいのよ」と思ったりして……。

5．うつを告白した

記者会見したくない理由をうつのためと、ツイッターで説明した。

大坂は自身が長年、うつ症状で悩まされていることを告白した。この告白で、世界の状況が一変したのだから、おどろきだ。バッシングの嵐から同情へと、風向きがすっかり変わった。多くの人が大坂を擁護する立場に変わった。罰金を課した主催者など、平謝りすることになった。高額な罰金を課す雰囲気ではなくなった。

大坂は、自身の心の状態を、うつというより、最近ではａｎｘｉｅｔｙと表現しているという。辞書では、不安・心配と訳される言葉だ。「気が休まらない」状態をいう。それが長く続くのなら、病的な状態と診断されるかもしれない。いずれにしても、それは精神的な弱さと言えるものだろう。大坂にはナイーブなところがある。図太さに欠けるところがある。差別問題など

に関しても、センスティブだ。
全仏を棄権した後、大きな反響が響き渡り、大坂は引きこもってしまった。
コートを行き来するときや、休息時間中に、大きなヘッドフォンをつけている理由も語った。
「雑音から耳をふさぐため」という理由だった。音楽を楽しんでいたわけでもなく、精神を集中するためでもなかったわけだ。他人が自分に対して発する言葉に、おどおどしていたわけだ。

6．大坂の精神力

優勝したとき、マスメディアは「精神的にも強くなった」と褒め称える記事を載せたが、本人は逆に、ａｎｘｉｅｔｙの状態にあって、そうは思っていなかったのだろう。
大坂が優勝する前、負ける要因を精神的な弱さに求める向きもあったが、やがて彼女が主要な大会で優勝し。世界ランクの１～２位の最上位に上がったことについて、〈精神的に強くなったから、優勝した〉と説明していた記事が多かった。でも、本当に精神的に強くなったのだろうかと、疑問がわいてくる。
日本人は一般に、すぐに精神論を持ち出し〈精神的に強くなければ、試合に勝てない〉としている。けれど、単に精神論では勝てない、と私には思える。彼女の場合、精神的に弱くても強くても、優勝している、と私には思えるのだ。つまり、精神的な強さは変わらなかった。ただし、プレー中に集中力が増したことは確かなようだ。
他人からあれこれ言われることに、大坂なおみは耐えられない。うるさく言うコーチなども、大坂は嫌っていた。大坂は、かつて有能と思われていた一流コーチを首にしたことでも知られている。
大坂は、記者会見に慣れなければいけないのかもしれない。辛らつな記者の質問を受け流すことも、プロのテニスプレーヤーに必要な素質の一つかもしれない。その他大勢からどんな批判が増幅してこようと、聞き流せるだけの自信を持つことかもしれない。そもそも、そんな批判は参考にならないものだから、耳を傾けない。コーチの言うことだけを聞いていれば、ほぼ間違いない。
今後、試合後の記者会見は、どうなるのだろうか。大坂の反乱によって、それを選手に押しつけたり罰金を課したりすることなどは、できなくなるだろう。

③ 愛知リコール署名集めの重圧

【毎日新聞朝刊 2021/2/17 社会
愛知知事リコール運動で、事務局がバイト募集し、署名を偽造したか。事務局長の田中孝博氏が名古屋市の広告関連会社に発注していた。】

【読売新聞朝刊 2021/2/18 社会
愛知県知事のリコール運動の不正が疑われる署名が大量に見つかった問題で、佐賀県でバイト男性が大量に偽造したことを証言。】

【毎日新聞朝刊 2021/2/23 社会
愛知リコール不正、「愛知１００万人リコールの会」の会長・高須克弥氏は関与を否定した。大村秀章秀章知事と対立する河村たかし市長は「応援団」として支援していた。２０１０年に河村氏自らが主導した市議会解散請求の「受任者」の名簿３万人分を知事リコール運動でも役立ててもらおうと、リコール事務局に貸与していた。リコール運動では、提出された約４３万人の署名のうち８３％の約３６万人分を無効と判断、同じ人が書いたと疑われる署名が９０％、選挙人名簿に登録の無い署名が４８％とされる。県選管や名古屋市は地方自治法違反容疑で刑事告発した。】

【毎日新聞朝刊 2021/2/27 社会
愛知リコール、署名の捺印重複１０万超、複数の人物が同じ捺印を何度も押したと見られるものが少なくとも計１０万８０００人分が含まれていることがわかった。日付が署名集めの期間外だったものが約１万１０００人分あった。印鑑もしくは指印による捺印が必要。氏名は自筆、捺印は本人のものでなければならない。】

【日経新聞夕刊 2021/5/19 社会
愛知知事リコール・署名偽造事件で、事務局長と次男と妻、事務局幹部・渡辺美千代の４人を逮捕。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/21 社会
愛知リコール、高須氏の秘書も自身の指印を押したことが判明した。高須氏は４月に（秘書から）報告があったことを認め、「何でそんな違法なことをやるのか」と叱責したという。】

【毎日新聞夕刊 2021/5/21 社会
愛知リコール、提出直前に大量の署名簿を佐賀から愛知に４回に渡って運搬した。押印を押す作業が間に合わず大半を廃棄したという。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/22 社会
愛知リコール署名偽造、事務局長が周囲に、「佐賀でのことは、高須さんも知っている」と話していた。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/23 社会
愛知リコール、事務局長が偽造発覚を恐れ、署名簿を自宅で保管した。
「愛知１００万人リコールの会」は２０年６月に設立、８月２５日に署名活動を始め、１０月に終了した。】
【毎日新聞朝刊 2021/5/30 ちょっと違和感・松尾貴史
愛知県知事・大村秀章氏のリコール（解職請求）運動での署名偽造事件では、解職請求のためには約８６万人分の署名が必要だったが、提出された署名は４３万人分余りで、半分程度にしかならなかった。集まった４３万人のうち約３６万人分が不正署名だったという。主導したのは高須克弥氏で、彼の秘書が押印を不正に押す作業を手伝っていたことも判明した。】

愛知県知事のリコール（解職）を求める署名集めで、組織的な不正が行われた状況が浮かび上がった。内部告発がきっかけとなって、すっかりばれてしまった。その不正内容が、本人の知らない書類に署名・捺印がなされたり、もう亡くなっている人の名前で書類が作られていたりしているのだから、ひどい偽造だ。しかも、その手口として、事務局が業者に委託し、九州で人集めして大量に書かせたことが判明した。

組織的といっても、手足となって動いた一部の「実行犯」的な人たちが逮捕・起訴されただけだ。関与が疑われるトップの連中は「不正に関して知らなかった」と言えばすむらしい。それにしても、なぜ実行組の彼らは、不正とわかっていながら、署名書類を偽造したのだろうか。

そもそも、リコール運動にはルールや制約があり、いくつかの手続きを踏んでいかなければならない。なかなか骨の折れる運動であり、多くの人員と、多くのエネルギーを必要とする。リコールを求めることに先立つ手続きとして、その請求に賛同する人の署名集めが、特にたいへんだ。人々にリコールすべき理由を示し、同意を得なければならない。書く側もそれなりに手間と時間をかけなければならない。厳格な書面に住所と名前、日付を書き、捺印しなければならないのだから、めんどうだ。この署名集めの期間が限られるから（２カ月間）数量的に難しいことになっている。県レベルでのリコールでは、どえらい数の署名が必要だ。リコールにこぎつけるためには、多くの県民を扇動しなければならない、そのための時間と費用もかかる。

結局、「愛知１００万人リコールの会」は４３万人分の署名を選挙委員会に提出したわけだ。署名した数

が、愛知県の場合に必要な数の８６万に、はるかに届かなかった。その数では意味がなく、リコールの手続きに進められない。それらはすべて無効扱いにされる。その場合、署名された書類が有効か否かの審査もされず、廃棄されるところだった。

しかし、不正疑惑が持ち上がり、メディアで取り上げられ、警察にも告発されたものだから、多くのことが明るみに出た。「愛知１００万人リコールの会」が持ち込んだ４３万人分の署名が無効にされただけでなく、悪事の証拠品として差し押さえられたのだから、実についていない。中途半端な数の署名簿を提出したことがいけない。提出しなければ、捜査も行われず、関係者の逮捕もなかったはずだ。

愛知県知事をリコールするの場合、請求するためには８６万人の署名を、所定の期間内に集めなければならないから、相当な熱意がないと達成できない。ハードルが高い。（単にリコールを請求するだけのことに、なぜこれほどの数を必要とするのか、私は疑問に思う。リコールされたくないという政治家たちの思惑が反映しているのだろう）

それが達成できたとしても、それだけではリコールにならない。さらに、解職の賛否を問う住民投票にかけなければならない。それでリコールが成立したとしても、改めて選挙で候補者の中から新たな知事を選ばなければならないから、そうとう手間隙がかかるものだ。

そんな手間をかけるより、任期切れを待って、次の選挙で県民に審判を仰げはいいことだろう。知事の任期は４年だから、長くはない。知事の４年の任期終了を待って、定例的な形で選挙をしては遅いのだろうか。待てない事案だったのだろうか。

任期の途中で、どうしても大村知事を引き摺り下ろしたい理由とは？

明確な具体的理由がはっきりしない。一番大きな理由とされているのが、２０１９（３年ごとの芸術祭）で、知トリエンナーレ２０１９年８月に開催された愛展示された作品の価値観の違いがあったことだ。「表現の不自由展」で、政治的意図があるとも受け取れる問題作が多く集められていた。名古屋市長の河村氏などは表現の不自由展をけなしまくった。そんな問題作に対して、容認派の大村知事がとった対応が、反対派には〈**気にくわん**！〉ということだろう。

〈あんな知事は引き摺り下ろせ、リコールだ！〉

そんな感情的なわだかまりがあったのだろう。この

一件だけではないらしいが……。世の中に多い権力争いと言うより、個人的な意見の相違があって、確執となったわけだ。

しかし、愛知トリエンナーレはもう終わったことであり、いまさら、それを持ち出しても、ラチもないというべきだろう。リコール運動するなら、もっと早い時期にするべきことだ。それを執念深く批判するのもどうか、というところだ。

同様に、大村氏に反感を持った高須氏が、河村氏とタッグを組み、リコール運動を主導する役を買って出た。

県民を扇動できるとみた彼らは、「愛知１００万人リコールの会」を立ち上げ、愛知トリエンナーレの約一年後の２０２０年８月２５日に、署名集めを開始した。署名集めの期間は２カ月だ。事務局がその実行を担った。この組織作りだけでかなりの労力と金を使ったことだろう。それなりの組織作りをしたようだが、リコールの署名集めが、はかどらなかった。県民の間でリコールの機運が盛り上がらなかったわけだ。

河村氏は１０年前の古い名簿を事務局に渡した。あたかも「この名簿の名前を書き写したらどうか」とでも言うように、そそのかした。

１０月に入って、このままでは、目標の１００万はおろか、リコール請求が有効になる８６万票にも届かない。署名の集まりが悪いことにあせってきた高須氏は、事務局にハッパをかけたことだろう――

「何でこんな数の署名しか集められないんだ？　オマエらは今まで何をしていたんだ」

「ナニー、署名してくれる人が少ないだと？　オマエらのやり方が消極的なんだよ、もっとしつこくお願いしてみろ！」

「ナニー、資金の集まりが悪いだと？　そのために活動資金が足りなくなるのなら、オレが出す！」

自己顕示のためのような高須クリニックのＴＶコマーシャルの中で、彼は満面の笑みを浮かべているが、部下や事務方の前では、鬼のような形相で怒鳴りつけたことだろう。ワンマン医院長の本性をむき出しにするかのように、吠えまくる。

「集められないなら、テメーらは首だぞ」と、圧力をかける。恫喝する。

「人手が足りないなら、人材派遣会社なりに委託したらどうだ。カネを使え。テメーら、知恵をしぼったんか？　頭を使えよ。署名と捺印を、何とかして集めてこい！　１００万の署名簿を、耳をそろえてここに持

ってこい！　持ってこれない言い訳などするな！　そんな言い訳、オレには通用せん。ホラホラ期限が迫ってきたぞ、もたもたするな！」

事務方の人々は、ボスに言葉を返すこともできない。確かに、高須氏は不正をしろとは言っていない。記者たちに問われたとき関与を否定したけれど、部下たちに圧力をかけたことは、否定できないだろう。

追い詰められた事務方は「何をしてもいいから、とにかく集めろ！」と言っているように聞こえたことだろう。そして、手っ取り早い方法を思いつく――

〈そうか、署名と捺印なんだな。誰が書いても同じだろ。必要なのは、愛知県有権者の名簿とそれを書き写す人手だな。よしっ、名簿業者から名簿を手に入れよう。河村さんが貸してくれた名簿だけでは足りんよ。書き手の頭数を揃え、机を並べて作業させよう。一気に大量生産だ。街頭に立って、道行く人にいちいちお願いすることなんて、やってられるか！〉

〈ただし、バイトたちに捺印まで押せとは指示できないから、それだけはオレたちがやろう。九州から書類を持ち帰ったときにオレたちで押しまくろう。一度に持ってきても、無理だな。押印が追っつかんよ。いくつかに分けて持ってこよう。捺印は指でいいんだ。指なら、１０本あるぞ。連続して同じ指で押さないように……。秘書さんも協力してくれよ。ボスのためだ。ボスの顔を立ててやろうぜ〉

彼らが九州から持ち帰った帳票は、膨大な数であり、結果的に期限までに捺印を押せなかった分が相当数あったことがわかっている。アルバイトに書かせた帳票にすべて押せたとしても、８６万には届きそうもないのだから、やっている人たちはバカらしくなったりして。

署名簿の提出日になった。捺印を押せたものをかき集めた。押せなかったものは泣く泣く廃棄に回した。結局、４３万人分の署名簿だった。彼らは、事務局の成果として、自分たちの努力の結果として、代筆であろうと何だろうと「これだけ集めたんだ」ということをボスに示したかった。ずっしりと重い署名簿の束を段ボールの箱に詰めた。終盤になって署名簿が急に増えたことで気分を良くしたボスに先導されて、愛知県の選挙管理委員会に持ち込んだ――

④　ＡＬＳ嘱託殺人疑惑の医師が関わった父の死

【読売新聞朝刊 2021/5/14 社会

ＡＬＳ女性患者への嘱託殺人罪で起訴された医師の山本直樹容疑者（４３）と母親の淳子容疑者（７６）らが２０１１年３月５日、父親の靖さん（当時７７歳）を殺害したとして殺人容疑で逮捕した。５日前契約したアパートに連れ出し、靖さんはその日のうちに死亡した。】

【毎日新聞夕刊 2021/5/14 社会
ＡＬＳ殺人容疑の医師、父親の靖さんの胃ろう手術を拒否、その後、転院先が見つかったとして靖さんを東京都内のアパートに連れ出した。靖さんは長年、精神科の病院へ入退院を繰り返していたという。】

父親の靖さんは、〈長年、精神科の病院へ入退院を繰り返していた〉という一文から、隔離する施設に入院させざるを得ないような、手に負えない存在であり、家族に迷惑をかけていたことが伺い知れる。彼らに言わせると、靖さんは「周囲を不幸にする」人だった。

２０１１年３月には、胃ろうの手術をしなければならない状態になった。担当医が、家族に同意を求めたということは、靖さん自身では、食べ物を口から飲み込むことができなくなっており、さらに、その手術するか否かの判断もできない認知レベルになっていたことがわかる。つまり、もう回復が望めず、心身ともに終末期になっていたわけだ。

胃ろう手術をして、少しぐらい生きながらえさせるより、自然に死を迎えてもらいたいと家族は思ったのだろう。胃ろう手術を断った山本直樹は、靖さんの死を早める決断をした。〈父の意思に無関係に、心臓は動いている。もう延命措置はしない、できるだけ自然に、心臓を止める……〉　そして自分たちで死亡診断書を作成する。

アパートに運び込まれた靖さんがその日のうちに死亡したことは、山本直樹らが死を早めるための何らかの処置をしたと推察される。終末期の医療を行わずに死を早めたケースだとしても、早すぎる……。

警察としても、その疑いを抱いたわけだ。だいぶ過去のことであり、それを解明して立件するのは難しそうだが……。

死を早めたことに妻の淳子も関わったとされる。つまり、息子である山本直樹と話し合っていた。家族の合意が成立していた。心身ともに壊れてしまっていた靖さんを早く死なせよう、という相談がまとまったわけだろう。

このまま病院で延命治療をしてもらうより、墓に入

れて永遠の眠りに付かせる……。家族ができることの最善策と考えての選択だったのだろう。靖さんの本心もそれを望んでいると確信してのことだったかもしれない。冷徹な決断だったのかもしれない。

死ぬまで家族に厄介をかけた靖さんとしては、それで恨むようなことはないかもしれない。しかし、法の下では許されないことだ。警察が動きだし、必要な証拠を集めて逮捕に踏み切ったのは、彼らの失敗ということになる。

⑤ ハマスの攻撃とイスラエルの過剰反応

【毎日新聞朝刊 2021/1/31 記者の気持ち
パレスチナ・ガザ難民（約１６２万人が暮らし、７割が失業者といわれている）、取材した記者には怒りがにじんでいた。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/13 一面
５月１０日から始まった戦闘で、イスラエルは夜間を中心にパレスチナ・ガザに１４０カ所以上空爆、ガザで計４３人死亡、子ども１０人を含む。】

【読売新聞朝刊 2021/5/13 国際
ガザからロケット弾数百発が発射された。イスラエルは５００カ所を空爆。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/25 火論
紛争学の専門家によれば、人々が敵を憎むことが自己の存在意識（アイデンティティー）にもなっている。敵に依存して生きている。和平は自己自身を失うのも同然で受け入れにくいのだ。】

【毎日新聞夕刊 2021/5/21 一面
５月２１日ガザで、イスラエルとハマスが停戦合意を表明した。戦闘は５月１０日から始まり１１日間に及んだ。イスラエル首相府「軍が（戦闘で）すばらしい業績をあげた」
ハマス幹部「敵に恥をかかせることができた」
ハマスが運営するテレビ局では勝利の歌が流された。エルサレムで４月、イスラエル治安当局が旧市街の入り口の一部を封鎖したことで、パレスチナ人の間で反イスラエル感情が高まる中、パレスチナの少年が超正統派ユダヤ教徒の顔を平手打ちする場面が動画投稿アプリ「Ｔｉｋｔｏｋ」で拡散した。
５月１０日、パレスチナの守護者を自認するハマスはロケット弾をエルサレムに向けて発射した。イスラエルが報復としてガザへの空爆を開始した。】

【毎日新聞朝刊 2021/7/4 総合

イスラエル軍とハマスの戦闘が起き、５月下旬に一時停戦してから約１カ月、両者は引き続き長期的な停戦に向けた交渉を継続する。イスラエルはガザへの物質を厳しく制限し、交渉を有利に運ぼうとしている。ガザ市民の苦境は続く。今回の戦闘で２万５０００軒以上の住宅と数百の工場が破壊されたが、再建が滞っている。】

イスラエルは、また「ガザいじめ」をしている。今回の戦闘で、結果的にパレスチナ側に対してイスラエルの一方的な破壊行為、殺戮行為になっている。ガザ地区の反イスラエル勢力を退治しようとするが、一般市民を巻き込むから、それはイスラエルの「ホロコースト」というべきものになっている。

圧倒的な兵力差のある戦闘で勝利したところで、自慢にもならないことだ。

ガザ地区にいるハマスは、強硬的なイスラエルに対してロケット弾をイスラエル側に打ち込むことで、せめてもの反撃を行う。しかし、イスラエルは、その強力な武力で、その１００倍以上の破壊力で、反撃する。

１発打つと、１００発打ち返してくる相手に、戦闘行為を続けたパレスチナの武装勢力・ハマスの心意気は、旧日本軍の精神に通じるものがある、と私は思ったりする。言い換えれば、１００発打たれたら１発を打ち返さざるを得ない。ハマスはそんな割の合わない攻撃をしている。

パレスチナ側はハマスがゲリラ的にロケット弾をイスラエル側に打ち込むだけだが、イスラエル側は航空兵力による爆撃や地上からの砲撃を行う本格的なものだ。世界有数の兵力で対応する。両者民間人を巻き込んでの破壊行為を１１日間続けた。断然、パレスチナ側の被害が大きい。こんな一方的に攻撃するから、イスラエルに対するパレスチナの恨みが募るのだ。一矢報いたくもなるだろう。

イスラエルの圧倒的な兵力に立ち向かう、せめてもの抵抗がハマスのロケット弾攻撃だろう。ガザ地区のパレスチナ人がハマスを支持するのにも、それなりの理由があるというものだ。ハマスはパレスチナの味方になってくれる。憎いイスラエルにロケット弾を撃ち込んでくれるから、市民に支持されているところがある。ロケット弾にはパレスチナ人の怨念がこもっている。

絶対有利な立場を悪用して相手をたたくやり方は「邪

悪」だろう。自分たちが受けた被害以上の攻撃を行ってはいけない。反撃が反撃を招くから、被害以上の攻撃を行っていては、収斂しないからだ。やられた分以上のことをやり返しては、その差し引き分が、悪になりうる。

反撃するのは正義であるかもしれないし、防衛のために必要なことかもしれないが、やりすぎる反撃は正当ではない。

やられたらやり返すのが正義かもしれない。これをイスラエルは正義だと思い込んでいるのだろう。武力行使を正当化するための言葉として「正義」が使われる。双方にとって正義といえるものでなくてはならない。

被害があると、それが軽微だったとしても、どうしても感情的になるところだから、自制が必要なのだ。パレスチナ人のささいな抗議行動に過剰反応を起こしているのがイスラエルだろう。

一応の停戦合意によって、イスラエルは相手を武力で直接叩くことを控えている。ガザの街の主要なポイントを破壊しつくした感があるのかもしれない。充分に痛めつけたと思っているのだう。しかし、まだ間接的な攻勢を継続する。ガザ地区への物流を止める作戦を取っているという。つまり、物流経路を封鎖し、取り囲んでの兵糧攻めをしている。和平にはほど遠い状況だ。

物流をとめられる側は、苦しい。住民の衣食住で、すべて物不足に陥る。そのやり方は、イスラエルがずっと以前より行っていることだが、今回、さらに厳しく制限し始めたという。私はそれを「イスラエルはガザ地区のパレスチナ人を徹底的にいじめている」と表現したい。その生存さえ脅かしている。これで、ますます苦境のガザの住民は、全員難民となるしかない。部分的に残されたパレスチナの地を「出戻り組みの人々」に明け渡すことになるのだろうか。

⑥ ミャンマー、クーデター首謀者の自己都合

【毎日新聞夕刊2021/2/1 一面

２月１日、ミャンマー軍がクーデターを実行した。国軍の最高司令官ミンアウンフライン氏が全権を掌握し、国家顧問兼外相のスーチー氏、ウインミン大統領、複数の政府幹部らを拘束した。国軍は全土に非常事態宣言を発令した。２０１１年に民政移管されたミャンマーで、軍政が復活することになる。

国軍は同日、暫定大統領に軍出身のミンスエ副大統領を指名した。ミンスエ氏は立法、行政、司法府の全権限をミンアウンフライン国軍最高司令官に移した。】
【毎日新聞夕刊 2021/3/4 社会
ミャンマーのデモ、３月３日だけで３８人死亡。政府はジャーナリスト６人を追訴、「社会不安をあおり、偽のニュースを流布したなどとする。これまでジャーナリストの拘束は３４人に上るという。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/11 オピニオン・激動の世界を読む、熊本県立大理事長 白石隆
ミャンマー、民主化への険しい道。ミンアウンフライン国軍最高司令官は、政治舞台を降りるのを拒否し、アウンサンスーチー氏を引きずりおろした。ミンアウンフライン氏は１９５６年生まれ。２０１６年に退役年齢を延長し、６５歳で退役すると約束した。彼はスーチー氏に国防治安評議会の開催を繰り返し求めたが、スーチー氏は譲らなかった。軍トップの交代は時間の問題であり、軍との協議はその後でよいと考えた。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/25 国際
ミャンマー、治安部隊が(民主派の)自宅に押し入り、父親とともに7歳少女を射殺。】
【毎日新聞朝刊 2021/5/22 総合・社会
ミャンマーで拘束された後、解放された日本人ジャーナリストの北角さんが会見した。取調べの際にドンと机をたたかれ、「外国人がこの国で好き勝手なことができると思うな」と脅された。「虚偽の調書が作成されていた」】
【毎日新聞朝刊 2021/7/4 国際
ミャンマー、国軍による弾圧の死者は、７月２日現在で８８８人の上る。路上での抗議デモは、治安部隊が来る前に解散するフラッシュ型に変わり、小規模化している。一方で、市民が結成した人民防衛隊と国軍側の治安部隊の戦闘は激しさを増している。】
【毎日新聞朝刊 2021/7/6 総合
加藤勝信官房長官は、４月にミャンマーの治安部隊が日本大使館員らの自宅に押し入って民主派を捜索した事件を巡り、ミャンマー側が非を認めたことを明らかにした。】

クーデターで、アウンサンスーチー氏を首班とする民主的政権をのっとった軍部に、国民の反発は強い。
国民がいくら反発しようと、ミャンマーの軍事政権は、その武力を用いて、強引に押さえ込もうとするのだから、すさまじい。一般民衆に対して武力を行使す

る、強硬な態度に徹している。
「最高指導者」になったのが、クーデターを主導したミンアウンフラインだ。軍部のトップにいる人物だ。このクーデターを確かなものにするために、軍部を中心とする国家体制を固めるために、自分たちに逆らう者や、反対するものたちを力で押さえつける。権力者が国を統治するためには、有象無象のやつらに力を見せ付け、抑えつけるに限るのかもしれない。彼は、デモなどして体制を批判するやつらは、敵対する勢力であり、早々につぶしてしまう必要があると考えているのだろう。彼の思いを言葉にすると、
〈キサマら、精鋭の治安部隊に歯向(はむか)えると思ってるんか！〉
デモ隊制圧のために、実弾を使うのはミャンマーの伝統らしい（１９４２年にこの地を占領した旧日本軍の指導があった？）。大勢のデモ隊を追い払うためには、確かにそれが一番有効だろう。射撃を始めると、人々はクモの子を散らすように逃げ惑うから、かなりの実効性がある。ゴム弾を使ったケースもあるのだが、死ぬことはないにしても、相当に痛そうだ。ゴム弾が直接、目にあたれば、失明してしまう危険がある。（実際に世界ではその被害が報告されている）
特に、デモを主導・首謀する、あるいは扇動しているとみなされた活動家の若者たちが狙い撃ちされている。治安部隊は、監視カメラの映像などからその人物を特定すると、彼らを見つけ次第、射殺する。居所を突き止めたら、その場所に押し入って射撃する。子どもと一緒にいるなら、子どもごと射殺するのだから、すさまじい。そんな例が複数あることが新聞やテレビで報道されていることに、私は驚いている。
デモでの最初の死者（若い女性）は、額を打ち抜かれての死亡だった。彼女はデモの先頭に立っていたとされる。また、ある女性活動家の場合、デモに積極的に参加し、警察に拘束されたとき、警察で拷問を加えられ、「テメーの顔は覚えられている。今度デモをあおれば射殺する！」と警告された上で釈放された。彼女は死を覚悟しながら、またデモに参加したから、そこで額を撃ち抜かれた。遺族の証言などとともに、それがＮＨＫの報道番組に取り上げられていた。治安部隊は、若い女性でも、武器を持っていなくても、子どもでさえも、容赦なく射殺する。
一連の騒動で死亡した者の中には、治安部隊の銃撃だけでなく、狙撃手によってビルの屋上などから狙撃されて、死亡した人がかなりの割合を占める、と私は

みている。正確に目標を打ち抜く技量は、よく訓練されていることが伺える。

次にターゲットにされるのはジャーナリストたちだ。デモ隊と一緒に行動していれば、狙撃の対象にする。デモに参加しなくても、デモの様子などを取材しているとみなせば、彼らを徹底して取り締まる。取り締まる理由には困らない。「社会不安をあおり、偽のニュースを流布した」という理由をつければいい。彼らは、政権の都合の悪いことを世界に発信する「不埒なやつら」だから。

この一連の事態をミャンマーの国内問題として国際社会が腰を引いている現状では、国際的な圧力が弱い。このままデモなどが鎮圧され、軍事政権が居座る可能性が高い。それでクーデターが成功となるのでは、一方の政権トップだった国家最高顧問のアウンサンスーチーが無策、非力だったことになるだろう。

彼女はクーデターを予測せず、少しも備えをしていなかった。文民統制ができず、軍を統制しなかった。クーデターを防げなかったことで、彼女に責任の一端があるといっては、酷だろうか。

彼女は近年、国軍によるロヒンギャへの迫害をかばう姿勢を国際社会に見せたりして、国軍に妥協していたところがあったが、国軍は彼女を見限った。

クーデターが起きて４カ月時点（６月１日）で、国軍の弾圧による死者は８４０人以上にのぼったと報道された。その多くは射殺によるものだろう。この数は７月になっても増え続けている。７月２日で８８８人だ。

デモが鎮静化に向かっているとはいえ、国軍は国民の反発を招くことをあえてやっている。武力で制圧できたとしても、これでは正当性（あるいは正統性）はまったくない。国民すべてを敵にまわす行為だ。そのうち国民に見放される政権だろう。

なぜこんなクーデターを起こしたか、記事にあるように、熊本県立大理事長・白石隆氏が詳説している。私は以下のように理解した――

軍のトップのミンアウンフラインと民主派トップのアウンサンスーチーは、近年、協力関係を保ってきたが、確執が生じた。国軍としては、総選挙でいくら民主派が大勝しようと、国政において軍が権力を掌握し続けたい。軍を中心とする体制を確保したい。しかし、総選挙をするごとにＮＤＬ率いるアウンサンスーチーの勢力が増し、軍の権力・権益は先細りになってきた。軍政のためにせっかく制定した憲法も、改正されそう

になってきた。ミンアウンフラインは、自身が退役する前に、軍事政権を強固なものに立て直したかった。そのためには、国政の最高意思決定機関として「国防治安評議会」を立ち上げることだった。アウンサンスーチーに繰り返し要請したが、アウンサンスーチーは要請に応えず、引き伸ばしを計った。ミンアウンフラインは今年６５歳で退役するのだから、彼が退役してしまえば、軍の権威は低下するだろうという思惑だった。

ミンアウンフラインは軍のトップでいるうちに（６５歳になるまでに、権力を掌握しているうちに）、国防治安評議会を強引に立ち上げようと目論んだことが、今般のクーデターにつながった――

彼なりに危機感があった。彼がクーデターの首謀者となり、そして彼を中心に国軍が動いた。このクーデターで６５歳退役の規制を無効にして、ミンアウンフラインは当分の間トップの座に居座り続け、そのうち軍人の中から後継者を指名するのだろう。

⑦ 朝乃山、テメーは６場所出場停止だ！

【毎日新聞夕刊 2020/8/5 総合

幕内力士・阿炎（あびぇ）（２６）が日本相撲協会に引退届けを出した。阿炎は７月場所前と場所中の１２回、別の部屋の幕下以下の力士１人を含む知人らと接待を伴う飲食会に行っていたことが判明。】

【読売新聞朝刊 2020/8/6 社会

阿炎は、場所中に接待を伴う「夜の店」に出入りしたとして場所を休場した。協会員は不要不急の外出自粛が求められていたが、阿炎は場所前と場所中に無断で外出した。阿炎は一時３７度以上の高熱があったが、抗原検査で陰性だった。】

【毎日新聞朝刊 2020/8/7 焦点

引退届け提出の阿炎、３場所出場停止処分とし、理事長が引退届けを受理しなかった。阿炎は言動奔放な「超新人類」、将来を考慮し苦肉の協会。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/21 社会

朝乃山、場所前に外出し飲食店に出かけたことを認め、休場した。新型コロナ指針違反。】

【毎日新聞朝刊 2021/5/28 スポーツ

竜電３場所出場停止、感染防止のガイドラインに違反。不要不急の外出を繰り返した前頭・竜電（３０）に対し、出場停止３場所の懲戒処分にすると決めた。コンプライアンス委員会「無自覚で軽率な行為は許しがた

い」】

【読売新聞朝刊 2021/6/12 スポーツ、社会

朝乃山、６場所出場停止。

協会「（部屋の）指導体制が不十分だ」

キャバクラに１０回行っていたが、協会側に虚偽報告した。朝乃山から引退届けが提出されていたが、理事長預かりとして再起を期待する。】

【毎日新聞夕刊 2021/6/11 総合

錦島親方（元大関・朝潮）が退職へ、朝乃山問題で引責した。朝乃山は、外出したことを週刊誌に書かれた。】

朝乃山が６場所出場停止の処分を食らった。これは厳罰というものだろう。彼らはひそかな楽しみをしていただけで、世間一般的に違法なことをしたわけではない。

朝乃山は大関だったし、将来は横綱へと嘱望されていた力士だから、このつまづきは大きい。ほとんどふりだしにもどされる処分だ。場所に出場しなければ、全敗扱いになるから、ランクがどんどん下がり、幕下以下にまで転落するといわれている。

大相撲を取り仕切る相撲協会は、今般のコロナ禍で、力士や親方などの会員に厳しい制約を課すガイドラインなるものを定めている。「新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン」だ。形の上では、不要不急の外出の自粛を求めるものだが、強制的なルールになっている。一人が感染すると他のものに感染しやすい環境であり、クラスターのリスクが高いためであり、感染者や感染した恐れがある者は出場できないから、興行的にも影響が大きい。そんな事情があるにしても、禁を破った力士に対して、見せしめのように重い処罰を下すのは、やりすぎだろう。その力士をひいきする者たちにとっては、出場しないのでは、がっかりさせる。

出場停止以上に、廃業や引退させる厳しい処分が、悪質とみなされた力士などに対して過去にいくつもあった。角界では、ほとんど粛清的な処分が行なわれるのが通例なのかもしれない。

ここ１～２年でいくつかの部屋でクラスターが発生したり、昨年には三段目の力士・勝武士の死亡したりして、協会は神経を尖らせていた。外出して多人数で飲食するようなことは禁止されている。特に場所中においてはご法度だ。それが、稽古に明け暮れる力士の唯一の楽しみかもしれないが……。

これまでに、この禁を犯したのがばれて、処分された力士が何人かいる。今年になって広く報道されただ

けでも、阿炎と竜電がいる。竜電の場合、交際相手（婚外）の女性のところに出入りしていたものだ。協会は、コロナに感染する恐れが大であると判断したのだろうか。妻の家に出入りするのだったら、不要不急とはみなされず、セーフだったのかもしれない。

また、今年一月には、場所中に風俗店通いがばれてしまった前時津風親方は、廃業に追い込まれた。

そんな先例があるのに、朝乃山は、ばれることを恐れずに、知人たちと東京・神楽坂のキャバレーに行っていた。力士のような目立つ人がキャバレーに出入りすれば、週刊誌記者などがすぐにかぎつけてしまうと考えるべきだった。実際にその取材班が店の近くに張り付いており、入店の現場を捉えた。力士たちはタクシーで乗りつけるから、シャッターチャンスは一瞬のことだ。。

部屋に常駐していた錦島親方が、そんな外出を黙認していたといわれている。力士の行動にたいへん物分りのよい人だった。そして、週刊誌の特ダネにされることにも無頓着だったことになる。協会が指導力不足の彼にも処分を下したのは、当然だろう。

阿炎と朝乃山は引退届けを出している。ただし、実際に提出するのは部屋の親方であり、本人の意向に沿っていない場合もありうる。この場合、阿炎と朝乃山は相撲協会に対して「詫び」を入れた形になってる。

引退届けには「すいませんでした。何なりと処罰を下してください。何であっても受け入れます」という意味合いがあり、殊勝にも、平身低頭を示している。でも、そんな引退届けは受理されないだろうと見越している。なお、阿炎の場合、彼が無断で外出したことで、ばれた後もふてぶてしい態度をとり、外出した回数をごまかそうとしたものだから、親方（錣山、元関脇・寺尾）が本気で怒りまくり、強引に引退届けを出した、と考えられる。

「阿炎、テメーは破門だぁ！　覚悟しやがれ！」

結局、阿炎は親方に詫びを入れたのだろう。３場所休場後に、土俵に復帰した。格下の者を相手にするのだから、勝ちまくる……。

若い力士がここで急に引退したら、本人が路頭に迷うかもしれないし、協会としても、有望な力士が辞めてしまうことは大きなマイナスだ。ファンが離れてしまうことであり、興行収入に響いてしまうから、配慮するのだろう。

力士を出場停止にすることは、身を切る思いというより「怒りの鉄拳」だろう。協会の絶大な権力を見せ

付け、配下の力士たちの統制をとるためのムチだろう。
朝乃山が重い処罰を食らったわけとして、週刊誌の報道後、協会が問いただしたところ、朝乃山は、同席者と口裏を合わせ、うそをついて言い逃れしようとしたことが悪質とみられた。ただし、阿炎も同様だった。
相撲協会は、６場所出場停止処分の理由にウソを挙げた。先例から考えれば、朝乃山の場合、３～４場所休場が妥当なところだろう。
このウソについて、私が申し開きをすると、週刊誌にばらされてしまった者の立場は弱い。自分の保身のためにうそをつきたくなるのが、初歩的な心理というものだろう。うそをついて身を守ることは、防御本能、あるいは自衛ともいえることであり、応急的な対応でもある。ばれないウソなら、それも方便だろう。
しかし、朝乃山はばれるうそをついてしまった。ウソがばれたときの立場は、もっと悪くなってしまう。やばいことになる。相手に責め立てられてしまう。小さなウソが、大きな叱責を受けてしまう。自分にとって、大きな損になることだ。そのやばさを計算して、最初から正直に言ってしまうのが、賢い選択だったはずだ。言い逃れはもはやできないと観念すべきだった。それほど賢くなかった朝乃山は、知人に入れ知恵されたらしく、見え透いたうそに走ったわけだ。それが愚かであるにしても、悪質かどうかは微妙なところだろう。ウソをつかれ、危うくだまされそうになり、面子をつぶされた協会は、いらだった。激高した。
「朝乃山よ、オマエもか！」
また、朝乃山が件（くだん）の店に到着したとき、週刊誌の取材班が張り付いていた。朝乃山に連れ立った知人がそれに気づき、その取材班に近付いて「**オレはしろうとじゃない！**」とすごんだことが記事にされている。そんな○○な知人との付き合いを協会側がよく思わなかった可能性がある。ちなみに、取材に関してしろうとじゃない、という意味合いだった。彼はスポーツ新聞の記者だった。有望な力士との人脈を築きたかったようだ。朝乃山は、その記者にそそのかされたか？

⑧ サッカーでのヘディングで脳損傷

【毎日新聞夕刊 2020/2/26 社会
英、子供のヘディングはダメ、脳にダメージがあるとして、英国にある三つの地域のサッカー協会が発表。米も制限。】
【毎日新聞朝刊 2021/5/11 国際

日本サッカー協会は、サッカーボール使用のガイドラインで、ヘディングは小５からとする。欧米でサッカー選手が神経変性疾患で死亡するリスクが高いとの研究を受ける。】

【朝日新聞朝刊 2021/6/19 スポーツ
サッカー、ヘディングの危険。イギリスで２０年前にヘディングによる脳障害が注目された。ジェフ・アストル氏の死だった。５５歳のとき認知症が発覚した。】

【毎日新聞夕刊 2021/6/24 特集ワイド
どうすれば安心安全。女子の脳しんとうに注意。
高校サッカーをする女子生徒がプレー中に脳しんとうを起こすリスクは、男子生徒の約２倍高いとする研究結果を、英グラスゴー大のチームが米医師会雑誌の関連誌に発表した。体格の違いなどで女子の頭部への衝撃が大きい可能性がある。】

なかなか点の取れないサッカー試合で、得点のチャンスが大きいのが、コーナーキックからのボールをヘディング（ヘッディングともいう）でゴールに打ち込むことだろう。選手は、他の選手より高くジャンプしてボールを捕らえる。額に打ち付けてボールを角度をつけて跳ね返す。それでゴールキーパーの守備を突破し、ゴールのネットを揺らせる。しかし、このときに脳が受ける衝撃は相当なものだ。頭には強い衝撃を与えてはいけないという基本認識から逸脱する。

私の高校時代のことを思い出すと、体育教科で級友にボールをトスしてもらってヘディングの練習をしたとき、頭に衝撃を受けるのが嫌いだった。ふんわりと上げたボールであっても、不穏な衝撃があった。我慢してやっていたけれど……。

サッカーのボールは重いし（一般用の５号で４１０～４５０グラム）、硬い（中の空気圧が高い）。思いきり足で蹴らないと、飛ばないようになっているけれど、脚力でピッチの半分以上の長さに飛ばすほどのスピードは出る。それを頭に当てるのだから、強烈だ。ヘディングでは、首を振り動かして額に当て、跳ね返す動作になるから、さらに衝撃が加わる。脳内だけでなく、頚椎（けいつい）が損傷する危険もあるだろう。

ヘディングで脳しんとうを起こしやすいのは、経験的に知られていることだが、科学的にもそれを実証する知見が得られてきた。脳しんとうを起こすほどの衝撃は、脳がダメージを受けたとみなさなければならない。

イギリスでは、ヘディングの名手として知られてい

た選手、ジェフ・アストル氏における死後の解剖で、脳の損傷が認められたという。現役時代にヘディングで衝撃を何度も受けたためだと推定される。

頭部が未発達な年少者のヘディングは危険という認識が広まってきた。ヘディングをしたくない少年少女にとって朗報だろう。

女は男より、脳しんとうを起こすリスクで2倍の違いがあることもわかったきた。男女で体格が異なるためのようだ。女性の頭部は比較的小さいから、起こりやすそうだ。なお、脳しんとうは、選手同士の衝突や転倒によっても起きるから、ヘディングに限定できないところだ。ちなみに、サッカーには飛んでくるボールを胸に受け、ボールをふんわりと地に落とす技があるが、女子選手は得意かもしれない。

そもそも、危険なヘディングがサッカーのルール上、許されていることが問題だろう。サーカーは足でボールを蹴ることが原則だが、「頭で蹴る」ことを許しているのはヘンだ。制約を加えたいところだ。たとえば、蹴ったボールをダイレクトで額に受けることは禁止する。一度以上地面に着き、バウンドしたボールなら、よしとする。

それとも、思い切って、全面的に禁止する。ボールを頭に当てたら「ヘッド」という反則にする。手や腕に当たると「ハンド」なのだから、その延長でもある。それでは、ますます点が入りにくくなり、面白くなくなるという人がいそうだけれど、それは観戦する側の言い分だろう。それに、敵味方の選手が高く上がったボールを互いにヘディングしようと同時に跳び上がったとき、双方の頭がガチンと当たる危険がある。彼らは飛んでくるボールばかり見ているから、周囲の人を見ていない。ヘディングを禁止すれば、この事故もなくなるだろう。

⑨ 命令に従う心

【日系サイエンス2016-06 ［ｎａｔｕｒｅダイジェスト・心理学］命令されると責任を感じない

１９６０年代の「ミリグラム実験」は、他者に危害を加えるよう命令された人がやすやすと実行することを示して物議をかもした。ミリグラムの研究は、ナチスによるユダヤ人虐殺の責任者だったアドルフ・アイヒマンの裁判がきっかけだった。アイヒマンは、自分が大勢のユダヤ人を死に至らしめたのは「命令に従っただけ」だと裁判で主張していた。

その現代版での実験で、人が指示に従って行動するときには自分の行動にあまり責任を感じないことが確認できた。２０１６年、認知科学者のグループが現代版の実験の結果をCurrent Biology誌3月7日号に発表した。現代版の実験グループリーダー、ハガードは、「命令に従っただけ」という弁明は、当人の感じ方を率直に露呈したものであることをうかがわせるという。】

この記事は、バックナンバーの科学雑誌から一部を要約・引用したものだが、人は命令されたならば、他人に危害を加えることでも実行してしまうことを明らかにしていることで、興味深い。つまり心理的に、人は命令されると、あまり悩まずに実行してしまうという。

これは経験的にも、そう思える。命令されたら、とにかく実行するのが下位者の役割（務め）だ。モラルに反しようと、その行為が人倫にもとろうと、不法なことであろうと、上位者の言うとおりにしていればいいんだ、という思い込みをもつ。それによって報酬・褒賞・対価・優遇を受けられるが、上位者の意に反すれば、そんな利益は得られないどころか、叱責を受け、不利な状況に追い込まれたり、自分の身が危うくなったりするから、選択肢が限られる。

絶大な権威や権限を持っている者には、逆らえない・逆らってはいけないのが下位者の［悲しいところ］だ。上下関係が、ある程度ゆるいなら、自己主張が可能だろう。ある程度差のある関係でも、「お言葉を返すようですが……」と切り出せよう。

それでも、正義感あふれる人がいるもので、たとえば会社組織の中で不正があれば、彼は内部告発したりする。会社側にとって、そんな正義は個人的なものとみなし、不都合な存在になる。個人プレーをすることであり、ほとんど「裏切り者」であり、反逆者だ。

特に軍隊では集団的作戦行動が必要だから、命令絶対服従が、下位の階級の者に厳しく求められる。上官の命令は絶対で、いやおうなしに従わなければならない。上官が、例えば「盗み食いした兵士（下位者にとって無二の戦友だった）を斬り捨てろ！」「足手まといの捕虜を始末しろ！」「ユダヤ人を抹殺しろ！」と命令したならば、「命令に従っただけ」のことを実行するしかない。命令に従っただけの実行犯たちを、戦争裁判で罪に問うのは、酷なところがある。どんなモラルや倫理よりも、命令には重みがある。戦争直後に、主に人道的に違反したとされるB・C級戦犯の日本兵

たちの多くが裁判で極刑に処されたことに疑問符が付く。「命令に従っただけ」という言い訳は、正当性をもつことになる。

アイヒマンは長年逃げ隠れしていたが、１９６０年にアルゼンチンでついに捕らえられ、イスラエルに移送された後、死刑判決を受けた。彼の場合、単に「命令に従った」というより、ナチスの幹部の一人としてヒトラーと共謀したところがある。

「アイヒマンなら、ジューのやつらを一人残らず収容所送りにしそうだ」と、ヒトラーに見込まれたりして。

人は集団の中では、業務が分担され、それぞれ役割を果たさなければならない。役割分担や実行内容は、上位者からの指示・命令によるものだ。その指示に従わなければ、責任を果たしたことにならない。上位者が「ノルマを達成せよ」言明したならば、下位者は何とかしてでも、達成するように励む。不法な手段を使ってでも、達成しようとする。上位者の命令とあらば、不法な（不正な）手段を使うことにやましさを感じなくなる例が多くある。だれでも、不法なことはしていけないことはわかっている。そうでもしなければ、達成できないとなれば、やむをえない選択になる。自分の職務を果たせないのであれば、集団の一員とは認められない。

上位者が絶対的な立場にいるならば、その実行は必須なものになる。否応なしに、実行しなければならない。服従しないものは、組織から落とされる。会社ならクビになり、軍隊では軍法会議にかけられる。拒否する権利などない。

組織的行動では、責任感を持って自分の役割を果たさなければ、組織として機能しない。命令されたことを、あれこれ考え「無理だ」「嫌だ」とは言わず、むしろ黙って従うことが求められる。実行しない選択肢など考えず、ただ実行のみでいい。社会的動物である人がこの心理を持つことは、社会生活に必要なこととして身に着けた「感覚」だろう。

その結果において事質的な責任を持つべきは、上位者にあることは明かだ。命令する側に責任がある。実行した下位者に責任を負わせられない。

上位者に誤算が合ったケースはもちろんのこと、実行者の技量や能力に問題があって言われたとおりに実行できなかったケースでは、技量や能力が不足した者に業務を任せた側に問題があるといわなければならない。目標達成を無理に押し付けたことになる。部下が指示した通りにしない。それも一つの誤算だろう。

⑩ みずほ銀行システム障害

【毎日新聞朝刊 2021/3/1 一面
みずほ銀、２月２８日、全国で障害か。ＡＴＭ画面に「お取り扱いできなくなりました」と表示が出て、カードや通帳が戻ってこなかった。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/2 一面
みずほシステム障害、更新作業で過負荷、ＡＴＭ吸い込み５２４４件発生。１年以上取引がない定期預金のデータ４５万件を移し変える作業を実施したところ、そこに定期的な月末のデータ更新が重なり、システムの処理能力を超え、障害が起きたとみられる。月末で取引量が増えたことが重なり、想定以上の負荷がかかってシステムダウンした。藤原頭取「もう少し余裕を持ったメモリー容量が必要だった」と弁明。事前の想定に不備があったことを認めた。】

【毎日新聞夕刊 2021/3/4 社会
みずほ、また３時間、２９台のＡＴＭ停止。ＡＴＭに投入したキャッシュカードが戻ってこないケースもあったという。２月２８日に発生したシステム障害とは「別の要因」によるものと説明している。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/5 総合
みずほ、ＡＴＭ障害、通帳電子化作業が原因。１年以上記帳取引のない口座をデジタル通帳にする。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/6 経済
みずほ銀、デジタル口座を延期。すでに計９０万件を移行した。しかし（残りの）４５万件と通常の月末処理２５万件の作業を行った２月２８日に、稼働中のＡＴＭが８割停止する事態を招いた。】

【読売新聞朝刊 2021/3/13 総合
みずほ、外貨送金で障害。トラブル４回目。企業の外貨建て送金のうち３００件程度に遅れがでたと発表した。１１日午後１１時４０分ごろデータセンターの機器に障害が発生した。バックアップ機器への切り替えにも失敗。みずほは約４５００億円かけて新しい基幹システムを作った。】

【毎日新聞朝刊 2021/4/6 一面、経済
みずほ銀行で２月末から４回にわたって発生したシステム障害について、原因や再発防止策を発表した。２月２８日、ＡＴＭ４３１８台が停止。キャッシュカードや通蝶５２４４件が取り込まれた。この原因特定に約７時間要した。みずほのＡＴＭは障害発生時に通帳やカードを取り込む仕様になっていた。また３月１１

日夜から発生した法人顧客などの外貨建て送金に遅れが生じた障害でも、バックアップへの切り替えに失敗した。故障したデータ機器を提供した日立製作所が復旧体制を確立しておらず復旧まで約７時間を要した。】

【毎日新聞朝刊 2021/6/17 余録

今年２月から４度にわたって発生したみずほ銀行のシステム障害、第三者委の調査によれば、カードが取り込まれるＡＴＭ障害は３年前にもあったが公表されずに改善策はとられなかった。】

１．システムダウン

みずほ銀行のシステムダウンについて、ほとんど部外者の私が口を出すことではないのだが、「メモリー容量が少なすぎた」「想定以上の負荷がかかった」という表層的な説明では、納得がいかない。システムダウンなどは単純なことに起因するものだが、事前に解決しておくという努力が必要だろう。

過負荷になったというなら、負荷を分散してピークを下げる運用がどうしてできなかったのか、という疑問が生じるし、過負荷で中央のコンピューターシステムがダウンしてしまうのが情けない。一部のタスクを後回しにして、１００パーセントのＣＰＵ使用率で処理を継続することはできなかったものか、と私は素朴な疑問を持つ。このシステムは過負荷になれば、すべての処理をあきらめて、止めてしまっている。やけを起こして、すべての仕事をブン投げたようなことをしている。もっと高負荷に耐えられるシステムを作ってほしい。メモリー容量を増やすだけでは能がない。

２．バックアップへの切り替え失敗

主システムの故障でバックアップ・システムに切り替えるのは、技術的な問題が生じやすいところだが、大きなシステムでは基本的な機能だ。何度かテストをすれば、初期的な問題があっても、解決できるものだ。今回も初歩的な問題が未解決のまま、一因となった可能性が大きい。その失敗は、ろくにテストをしていなかったことになり、関係者(日立？)は恥じるべきだ。

３．ＡＴＭのカード取り込み

問題点の最たることは、ＡＴＭのカード取り込みだろう。マスメディアも、それで大きな影響があったとし、ＡＴＭの前で困惑した人が多数いた、と報じた。

中央システムがダウンしてしまわないように、性能を上げたり、多くの技術的問題を解決したり、運用方法を改善したたとしても、それをゼロにはできないから、ダウンする可能性は残る。それが長時間に渡るこ

ともありうることを今回の事例が示している。そんな時、ＡＴＭ端末が、カード・通帳を飲み込んだまま顧客に返さないのは、いけない。

なぜＡＴＭはカードを取り込み、返さなかったのかと今のシステムエンジニアたちに問えば、彼らは「システムが動かなければ、ＡＴＭはカードを返さない仕様になっている」と、平然と答えそうだ。

銀行側には、システムダウンしたら「ＡＴＭに取り込んだカードなどは、そのままでいい」という考えがあるのだろう。それを考えたのは、銀行システムを初期の頃に構築したエンジニアたちであって、今でもそれが定着しているのだろう。他の銀行システムでも、そうらしい。それでは、ＡＴＭの前にいる数千人の顧客たちに待ちぼうけを食らわすことがいつかまた再発する。そんな仕様でいいとは、とても言えない。考え直すべきことだろう。

そんな場合、行員が対応して、裏技を使ってＡＴＭからカード・通帳を出して、顧客に渡すことになっているのだろうけれど、一台二台のＡＴＭが取り込んだのなら、それてもいいだろう。数千台のＡＴＭで取り込みが起きれば、限られた人数の行員では対応できないのは当然だ。ＡＴＭの設置場所は、昔のように本店や支店のように行員がいる場所ではなく、多くは無人の店頭に置かれている。行員がかけつけて操作するまで、時間がかかる。現に、今回のＡＴＭのカード・通帳の取り込みで、顧客たちは、何時間もＡＴＭの前で待たされた例が多い。

この対策は簡単にできる。その実現は銀行側にやる気があるかどうかにかかる。以下の方法を示したい。

ＡＴＭは、中央のシステムがダウンしたことがわかると、画面に「お取り扱いできなくなりました」と表示するようになっている。このとき、取り込んだカードや通帳があれば、吐き出せばよい。

ただし、長時間待たせてしまい、顧客がＡＴＭの前からいなくなることも考えられるから、カードや通帳を出すときには、再度、パスワードを入力させることでよいだろう。パスワードは一度照合したものだから、ＡＴＭはまた、停止中の中央に照合しなくても、憶えているものだろう。